

体験版

1度寝取らせてみたかっただけなのに。

俺は祐介、32歳の普通のサラリーマンだ。背が低くて、男らしいところなんてほとんどない。それがずっとコンプレックスで、性格も明るいとは言えない。地味で内気な男だ。それでも、妻の瑞穂とは結婚三年目。子供はいないけど、毎日が穏やかで、幸せだ。瑞穂は28歳のOLで、俺の幼なじみ。小さい頃から面倒見がよくて、ハツラツとした性格の女の子。160センチのスレンダーな体に、Gカップの大きな胸が印象的だ。幼い頃から彼女の無邪気さと優しさに惹かれていて、今でもその気持ちは全然変わらない。

俺たちは幼なじみとして育って、自然と恋に落ちた。小学校の頃、俺はよく泣かされて、瑞穂がいつも守ってくれた。彼女は活発で友達も多くて、みんなの人気者だった。俺はそんな彼女の影で、ただ見守るような存在だった。でも中学、高校と進むうちに、互いの気持ちが通じ合って、付き合い始めた。大学卒業後に就職して、数年後に結婚。今でも瑞穂は会社で明るく働いていて、家に帰れば俺のために手料理を作ってくれる。セックスも週に一度は必ずあって、互いの体を求め合う。瑞穂の体は柔らかくて、抱きしめると心が満たされる。でも俺のコンプレックスは消えない。もっと男らしく、彼女をリードできたらと思うけど、いつも彼女のペースに甘えてしまう。

ある日、週末に実家に帰った。母親が掃除をしていて、古い引き出しから出てきたという紙切れを渡された。「これ、祐介の机の奥にあったわよ」と笑いながら。「なんでもゆうときくけん」と子供の字で書かれていて、下に「みずほより」とひらがなで。懐かしい気持ちが込み上げた。小さい頃、俺は泣いてばかりで、瑞穂がそんな俺を励ますために作ってくれたプレゼントだった。彼女は「これで祐介の願いを叶えてあげる！」って言う

て渡してくれたけど、俺は大切にすぎで、一度も使わずにしまってたらしい。母親は「瑞穂ちゃん、元気？」と聞いてきて、俺は頷いた。胸が温かくなった。

家に帰って、夕食の後に瑞穂にその話をした。リビングのソファでくつろいでいるとき、紙切れを見せて説明した。「えー！全然覚えてないよ！てか、恥ずかしい……」と瑞穂は頬を赤らめて笑った。彼女の目は少し照れくさそうで、でもどこか嬉しげだ。「あのころ使ってたら、どんなこと言ってたんだろ」と瑞穂が懐かしむように言った。俺は「どうかなあ？でも、大切にしたかったんだろうな」と答えた。瑞穂は俺の肩に寄りかかってきて、「今なら？」と上目遣いで聞いてきた。その視線が可愛くて、結婚三年経っても素直に胸がキュンとなる。「今ならどんなお願い聞いて欲しい？」って。彼女の大きな胸が俺の腕に当たって、柔らかい感触が伝わる。「どうだろう。ちょっと考えとく！」と俺は曖昧に返した。「もう期限切れだもんねー！」と瑞穂が舌を出して笑う。その無邪気な仕草が、幼い頃から変わらなくて、ますます好きになる。

それから暫く時間が過ぎた週末のこと。俺たちは週に一度は必ずセックスをする。互いにしか異性を知らないはずで、それが純粹で心地いい。でも、その日はいつもより熱っぽかった。夕食後、なんとなくベッドルームに行き、キスから始まった。瑞穂の唇は柔らかくて、甘い。彼女の舌が絡まってくると、俺の体はすぐに反応する。「ん……祐介、好き……」と瑞穂が囁きながら、俺のシャツを脱がせてくる。彼女の手が俺の胸を撫で、首筋にキスを落とす。俺は瑞穂のブラウスを脱がせ、ブラジャーを外した。Gカップの大きな胸が弾むように現れ、ピンク色の乳首が硬く尖っている。「綺麗だよ、瑞穂」と言いながら、胸を揉みしだく。柔らかくて、重みがあって、手に吸い付くようだ。瑞穂は「あんっ……」と甘い声を漏らし、俺の首に腕を回す。俺は乳首を口に含み、舌で転がす。彼女の体がビクツと震え、息が荒くなる。「祐介の舌、気持ちいい……もっと……」と瑞穂がせがむ。俺はゆっくりと胸を舐め回し、吸い付きながら、もう片方の胸を指で弄る。瑞穂の

腰がくねり、太ももが擦れ合う。

下着を脱がせると、瑞穂のアソコはすでに濡れていた。指で優しく撫でると、クチュクチュと音がする。「あっ、んん……祐介、そこ……」と彼女が喘ぐ。俺は指を一本挿入し、ゆっくり動かす。彼女の内壁が締め付けてきて、熱い。瑞穂は俺のズボンを下ろし、手で俺のモノを握る。硬く勃起したそれを、優しくしごいてくる。「祐介の、熱い……入れたい……」と瑞穂が言う。俺は彼女を仰向けにし、ゆっくりと挿入した。ぬるぬるとした感触が包み込み、瑞穂の体が受け入れる。「ああんっ……祐介、奥まで……」と彼女が声を上げる。俺は腰を動かし、深く突く。彼女の胸が揺れ、Gカップの豊満さが視界を埋める。瑞穂の脚が俺の腰に絡みつき、引き寄せる。「もっとな激しく……祐介、好き……あっ、んんっ！」と喘ぎが激しくなる。俺は彼女の唇を塞ぎ、舌を絡めながらピストンを速める。汗が混じり、肌が滑る。瑞穂のアソコがキュッと締まり、俺を追い詰める。「瑞穂、俺も……」と呟きながら、限界が近づく。彼女の体が震え、絶頂を迎える。「いっちゃう……祐介、一緒に……あああっ！」と叫び、瑞穂がイク。俺はその瞬間に耐えきれず、中に放った。熱いものが溢れ、互いの息が重なる。

事後、腕枕で瑞穂を抱きながら、余韻に浸っていた。彼女の裸体が温かく、心地いい。「そういえばさ？」と瑞穂がこっちを見て言う。彼女の目は少し眠たげだけど、好奇心が輝いている。「なんでもいうこときくけん、何にするか考えた？」と聞いてくる。ドキッと心臓が跳ねた。何でも言う事を聞いてくれる券。あの紙切れのことを思い出す。

俺の胸に秘めた願いが、疼くように蘇る。俺は瑞穂を他の男に寝取らせたいと思っていた。大好きな彼女が、他の男に穢される姿を想像するだけで、興奮が止まらない。俺たちはお互いにしか異性を知らないはずだ。純粋な瑞穂が、他の男の手によって触られ、舐められ、舐めさせられ、挿入される。彼女の大きな胸が揉まれ、乳首を吸われ、アソコを弄

ばれる。瑞穂の甘い声が、他の男のために漏れる。彼女が感じて、腰を振り、絶頂を迎える姿。考えただけで、さっき出したばかりのモノがまた硬くなりそうになる。でも、それは俺のコンプレックスの裏返しだ。自分では満足させられないんじゃないか、という不安。男らしくない自分が、彼女を独占できない興奮。嫉妬と快楽が混じり合って、頭がおかしくなりそう。

「いや、それはまあ」と俺は茶を濁した。心臓が早鐘のように鳴る。「うわ！なんか考えてたでしょ！？なにになに？大人になった私な、何して欲しいの？」と瑞穂が布団で隠した半裸の体を寄せてくる。彼女の目は期待に満ちていて、エッチなお願いだろうと思っている様子だ。Gカップの胸が俺の胸に押しつけられ、柔らかい。「いや、でも」と洩る俺に、「夫婦でしょー？なんでも言ってよ！」と瑞穂が言う。彼女の無邪気さが、罪悪感を煽る。でも、抑えきれない。意を決して、告白した。

「一度でいいから、他の男と寝て欲しい。」

言葉が出た瞬間、部屋の中が急に静かになった。俺の心臓の音がやけに大きく聞こえる。瑞穂の体が、俺の腕の中でピクリと固まった気がした。

しばらく沈黙が続いた。布団の中で、彼女の息遣いが少し乱れている。俺はもう顔を上げられなくて、天井を見つめたままだった。やっぱり言わなければよかった。こんな変態じみたことを、幼なじみで大好きな妻にぶつけるなんて。

「……えっ？」

ようやく瑞穂の声が聞こえた。間の抜けた、信じられない、という感じの小さな声。俺の

胸がズキンと痛んだ。

「……ごめん。忘れてくれ」

慌ててそう言ったけど、もう遅い。言ってしまったものは取り消せない。俺は意を決して、目を逸らしたまま続けた。

「俺……寝取られ性癖があるんだ。瑞穂が他の男に抱かれるところを想像すると、頭がかしくなるくらい興奮する。嫉妬で胸が潰れそうになるのに、それと同時に……すごく気持ちいい。自分じゃ満足させられないんじゃないかって不安もあって、でもそれがまた興奮するっていう……最低だよな。俺」

声が震えてた。自分でも情けなくて、喉が詰まる。瑞穂の体温がまだ近くて、でも今はそれが怖いくらいに感じる。彼女が引いて、嫌悪の目で見るんじゃないか。離婚だってありえる。頭の中で最悪のシナリオがぐるぐる回る。

瑞穂はしばらく何も言わなかった。俺の胸に顔を埋めたまま、じっとしていた。彼女の長い髪が俺の肌に触れて、くすぐったいののに、動けなかった。

「……少し、考えさせて」

やっと瑞穂が小さな声で言った。顔を上げて俺を見ようとはしなくて、ただそう呟くだけだった。声に怒りや嫌悪は感じられなかったけど、驚きと戸惑いが混じっているのはわかった。

「うん……ごめん。急にこんなこと言って」

俺はそう返して、彼女の背中をそっと撫でた。瑞穂は小さく頷いて、それ以上何も言わなかった。

その日はそのまま、互いに背中を向けて眠りについた。布団の中が、いつもより少し冷たく感じた。

あれから数日後、俺たちはいつも通り夕食を終えて、リビングのソファでくつろいでいた。テレビの音が小さく流れているけど、俺の頭の中はまだあの夜の告白の余韻でいっぱいだった。瑞穂は特に何も言わなくて、俺も無理に触れなかった。触れたら壊れそうな気がして。

そんな中、瑞穂が突然、俺の隣に座り直して、顔を覗き込んできた。

「ねえ、和也くんって覚えてる？」

唐突な名前。俺は一瞬固まった。

「……和也？」

記憶を遡る。高校の時の……。

「ああ、高校の時の？」

俺がそう返すと、瑞穂はにこっと笑って頷いた。

「そう！ その和也くん」

「和也がどうかした？」

俺は平静を装って聞いた。心臓が少し速くなった気がする。

瑞穂はおもむろに、俺の膝に手を置いて、甘えたような声で言った。

「実はね、高校時代、和也くんに口説かれてたんだよねー」

ドキン、と心臓が跳ねた。

初耳だった。

和也はバスケ部のエースで、背が高く顔も良くて、女の子にモテモテだった。誰とでも分け隔てなく仲良くするいいやつで、だから陰キャな俺でも自然と和也と呼び捨てにできた。クラスメートとして、友達として、普通に接してた。でも、まさか瑞穂に……。

「へー、そうなんだ」

俺はなんとか平常心を装って答えた。声が少し上ずってるのが自分でもわかった。

瑞穂は俺の反応を楽しむように、イタズラっぽい顔で続ける。

「祐介じゃなくて俺にしなよ、とか。俺の方が幸せにするよ、とか……そんなこと言われ
たっけ」

胸が苦しくなる。嫉妬の棘が刺さるみたいに痛いのに、同時に下腹部が熱くなる。俺の知らない瑞穂の過去。俺が付き合う前とはいえ、そんなことがあったなんて、微塵も知らなかった。

「デートもいったんだ！一回だけ！あつ、でも祐介と付き合う前ね？」

また新事実が降ってきた。

俺はなかなか返事ができずにいた。喉が詰まって、言葉が出てこない。頭の中で、和也和瑞穂が並んで歩いてる姿が勝手に浮かんでくる。バスケットで鍛えられた和也の長い腕が、瑞穂の肩に回されて……。

瑞穂はそんな俺の沈黙を見て、ゆっくりと体を寄せてきた。

「ねえ」

彼女の声が甘く、耳元で囁く。

「こんな話聞かされても、寝取られ好きの祐介は……興奮するの？」

上目遣い。大きな瞳が俺を捕らえる。Gカップの胸が俺の腕に柔らかく当たって、熱い吐息が首筋にかかる。

俺は目を逸らせられなくて、素直に頷いた。

「……ごめん。興奮する」

声が震えてた。恥ずかしくて、情けなくて、でも止められない。

瑞穂はくすつと笑って、俺の耳に唇を寄せた。

俺を試すための嘘なのか？ そう思った瞬間、心を読んだように彼女が囁いた。

「和也くんに口説かれたのも、デートしたのも……ほんとだよ？」

甘い吐息が混じった声。俺の体がビクッと反応した。興奮と嫉妬が一気に渦を巻いて、頭の中が真っ白になる。

俺の体がビクッと反応したのを、瑞穂はちゃんと見ていた。

瑞穂は俺のそんな様子を見て、少し残念そうに、でもどこか優しく笑った。

「……ホントに寝取られがしてみたいんだね」

その声は柔らかくて、責めてるわけじゃない。でもその一言が、俺の胸を抉った。

「……ごめん」

俺はまた、それしか言えなかった。喉がカラカラで、視線を落とす。

瑞穂はしばらく俺の顔を見つめていた。静かなリビングに、テレビの音だけが小さく響く。彼女の瞳が揺れて、何かを考えているのがわかった。

そして、突然、彼女はパチン、と手を一度叩いた。顔がぱっと明るくなって、決意したような表情になる。

「わかった！ 和也くんとならいいよ！」

「……え？」

俺は思わず顔を上げた。耳を疑った。

「和也と？」

声が震えて、自分でもわかるくらい嫉妬が顔に出てる。眉が寄って、口元が歪んでるのが鏡を見なくてもわかる。

瑞穂はそんな俺を見て、くすっと笑った。悪戯っぽくて、でもどこか優しい笑み。

「うん。だって和也くんに劣等感感じてたでしょ？ 教室で喋ってる時とか、チラチラ見ってきて、嫉妬してるのわかったし。そのときは嬉しいだけだったけど……どうせ誰か他

の人に抱かれるなら、祐介が一番嫉妬して傷つく人にしてやろうと思ったんだ！」

淀みなく、さらっと言われた言葉が、俺の心臓を直撃した。

劣等感。嫉妬。全部見透かされてた。高校の頃、和也が瑞穂の近くにいるだけで、俺は胸がざわついてた。あの長身で、笑顔で、女の子に囲まれてる和也を見て、俺はいつも自分を惨めに思ってた。それを瑞穂は知ってて、しかも今、それを武器みたいに使う。る。

「それに……」

瑞穂は少し声を落として、俺の目をじっと見つめた。

「和也くんのこと、ちょっと……いいかもって思ってたこともあったし。もちろん昔から祐介が大好きだったからありえないんだけど、祐介がいなかったらきっと好きになってたと思う」

その告白が、胸を鷲掴みにされたみたいに苦しい。息が詰まる。俺の知らない瑞穂の心の奥底。俺じゃなかったら、和也を選んでたかもしれないという事実が、嫉妬の炎を一気に燃え上がらせる。

でも同時に、今まで感じたことのない興奮が体中を駆け巡った。頭が熱くなって、下半身が痛いくらいに硬くなる。瑞穂が他の男を「いいかも」思ったこと。それを今、俺に明かしながら、俺のために寝取られることを許すってこと。すべてが絡み合って、俺を狂わせる。

瑞穂は俺のそんな反応を見て、吹っ切れたように明るく言った。

「私の条件はそれだけ！あとは祐介と和也くんまで話してくれていいよ！」

彼女はそう言って、俺の頬に軽くキスを落とした。柔らかな唇の感触が、俺の混乱をさらに煽る。

思ってもないことだった。

瑞穂が寝取られる。

しかも、あの和也に。

頭の中で何度も繰り返して、胸が締め付けられるような苦しさ、股間が熱く疼く興奮が同時に襲ってくる。俺はベッドに座ったまま、スマホを握りしめて、深呼吸を繰り返した。

本当にこれでいいのか？後悔するんじゃないか？

でも、もう引き返せない。瑞穂が「和也くんとならいいよ」と言ってくれた瞬間から、俺の理性はどこかへ飛んでいた。

結局、俺は和也に電話をかけた。

高校卒業以来、連絡を取るのには数えるほどしかなかったけど、番号はまだ残っていた。呼び出し音が数回鳴って、懐かしい声が聞こえた。

「よお、祐介？久しぶりじゃん。どうした？」

俺は喉を湿らせて、切り出した。

「……和也。急に変な話で悪いんだけど……瑞穂を、寝取ってほしいんだ」

沈黙が落ちた。

向こうで息を飲む音が聞こえた気がした。

「……は？マジで？」

和也の声は明らかに動揺していた。俺は慌てて、でも必死に説明した。

俺の性癖のこと、瑞穂が了承したこと、和也を選んだ理由まで。

全部話すと、和也はしばらく黙っていた。

「……友達の奥さんと、とか……正直あんまり乗り気になれねえよ。マジで」

前置きが長くて、俺の心臓が縮こまる。

でも、和也はため息をついて、続けた。

「……わかったよ。祐介がそこまで言うなら、断らねえ。でも、ちゃんと瑞穂ちゃん本人がＯＫだって確認させてくれよな。俺も変なトラブルはごめんだから」

配慮してくれているような言い方に、俺は少し安心した。

和也は昔からそういうやつだった。女の子にモテるくせに、ちゃんと線引きするいいやつ。

それが今、俺の妻を抱く男になるなんて……考えただけで体が震えた。

電話を切った後、俺はリビングに戻った。

瑞穂はキッチンでコーヒーを淹れていて、俺の顔を見るとすぐに察したみたいだった。

「……和也くんと、連絡取ったの？」

俺は頷いて、ソファに座った。

「うん。寝取ってほしいって……頼んだ。和也、驚いてたけど、OKしてくれた」

瑞穂はカップを手に、俺の隣に腰を下ろした。

少し緊張した顔だけど、目が真剣だ。

「……そっか」

俺は意を決して、続けた。

「俺……目の前で瑞穂が抱かれてるところ、見たい」

即座に、瑞穂の表情が曇った。

「それは……絶対に嫌」

きっぱりと言われて、俺は言葉を失った。

瑞穂はカップをテーブルに置いて、俺の目を見て続けた。

「祐介の前で他の男に抱かれるなんて……想像しただけで怖いし、恥ずかしいし……嫌だよ。そんなの、祐介の顔見ながらなんてできない」

俺は胸が痛くなった。でも、諦めきれなくて、声を絞り出した。

「……じゃあ、録画してきて欲しい」

瑞穂の目が少し見開かれた。

「録画……？」

「うん。俺が見られるように……あとで、一人で……」

俺は何度も頭を下げて頼み込んだ。

情けなくて、惨めで、でも止められなかった。

瑞穂はしばらく黙って俺を見つめていた。

やがて、ため息をついて、小さく頷いた。

「……わかった。渋々だけど……祐介がそこまで言うなら、録画はする。でも、それだけだよ？ 他の条件はなし」

俺はホッとして、でも同時に罪悪感で胸が重くなった。

瑞穂の頬が少し赤らんでいて、俺は彼女を抱きしめたくなったけど、今はそれすら躊躇した。

寝取られ当日。

その日まで、あっという間だった。

なんとなく、瑞穂とも寝取られの話題は出なかった。

夕食のときも、テレビを見ているときも、普通に話して、普通に笑って、普通にキスした。でも、どこか空気が違う。瑞穂の視線が時々遠くを見るようになったり、俺が触れようとすると少し体を引いたり。

瑞穂はどんな気持ちなんだろう。

本当に和也と寝るのが怖いのか、楽しみなのか、それとも俺を傷つけるために我慢してる

のか。

俺は何も聞けなかった。聞くのが怖かった。

俺と和也で決めたのは、

その日は先にラブホに入って待つ和也の元に、瑞穂を派遣する形式だった。

俺は家で待機。

瑞穂が和也と終わったら、録画データを持って帰ってくる。

それだけ。

シンプルで、残酷で、俺の望んだ形。

当日。

瑞穂はいつもより少し丁寧に化粧をして、胸元が少し開いたワンピースを着ていた。Gカップの胸が強調されて、俺の視線を釘付けにする。

家を出る直前、玄関で靴を履く瑞穂の背中を見て、俺は声をかけた。

「……大丈夫？」

瑞穂は振り返って、俺を少し睨むように見た。

「祐介が言い出したことでしょ？」

その声に棘があって、俺の胸がチクツと痛んだ。

でも、それ以上に堪らなくなって、俺は瑞穂を抱きしめようとした。

キスをしようと顔を近づけた。

瑞穂はそれを拒否した。

首を振って、俺の胸を軽く押す。

「今日はだめ。祐介にはたっぷり傷ついてもらうんだから」

